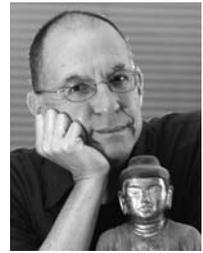


ワールドワーク
日本を歩く

ヤコブ・ラズ
Jacob Raz
テルアヴィヴ大学東アジア研究科教授

ヤクザは日本社会の 拡大鏡である



ヤコブ・ラズ●テルアヴィヴ大学東アジア研究科を創立。禅、日本文化、詩、美学、人類学を教える。精神療法および組織への仏教哲学の導入に貢献する「PsychoDharma」の創立者で副所長を務める。アラブ人とユダヤ人の対話を推進するNGO「Ma'arag」会長。2006年、旭日中綬章を受章

ヤクザの親分と杯を交わしたあと
ワールドワークが始まった

ひと際目を引く風貌のその男に私が出会ったのは、1987年11月のことだった。新宿は大西祭おおにしきの真っ最中で、その男は露店の傍らに立っていた。背は低く、髪をすべて剃り落とし、威厳のある顔つきだった。彼の背後には、がっちりとした体格の男が2人付き添い、周囲の動きに絶えず目を光らせていた。その男は明らかにヤクザの親分だった。

私は彼に近づき、露店で売られている祭りのお面について日本語で質問した。この質問をしたのは、もちろん彼と会話を始めるきっかけをつくりたかったからである。すると彼はとても丁寧な、お面について説明してくれた。

そのとき突然、彼は大声で「おい、酒！」と言った。酒が入った小さな杯が2つ運ばれてきたので、私は杯を交

わそうと彼に申し出た。もちろん冗談のつもりだった。すると彼は大層、驚愕した様子で、どうして自分がヤクザだとわかったのか、また何で私が杯のことを知っているのかを尋ねた。そこで私は率直に、ヤクザの社会について調査させてほしいと彼に頼んだのだった。

これが、ヤクザであり、詩人でもあるUと私との素晴らしい友情の始まりだった。また私は、Uとの関係を通して日本の裏社会について造詣を深めることになる。Uと知り合ったことがきっかけで、私は日本の社会で最も凶悪とされ、秘密のベールに包まれ、嫌悪されているヤクザという一団の中に足を踏み入れ、5年以上にわたりワールドワークをすることになったのだった。

**日本社会を知れば知るほど
裏の顔に興味を湧いた**

私は美術、哲学、禅、詩といった、言わば日本の表玄関から日本文化に足を踏み入れた。1972年に初めて日本を訪れてから、30年以上にわたってたびたび来日し、この国に住んだ経験も長い。日本のことを知れば知るほど、私は日本社会が持つさまざまな面、特に表からは見えない裏の顔に強い興味

束芋『hanabi-ra』（スチル）、2003年
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

を持たずにはいられなかった。こうして、私は日本の裏社会について研究しなくなったのである。

私は、新潟地方で活躍した盲目の女旅芸人である警女こせの研究を皮切りに、てきや的屋、詐欺師や浮浪者、そして遂にヤクザの研究に乗り出した。しかし、ヤクザと接触するのは容易なことではない。最近のヤクザの抗争について話を聞き出すために、ヤクザの親分に頭を下げるジャーナリストたちを除けば、一般の日本人がヤクザと接触する機会はほぼ皆無である。

日本の犯罪学者や文化人類学者が、留置所または拘留場で彼らにインタビューを行なった例はあるが、現役のヤクザ相手に長期間のフィールドワークに成功した例はない。かなり以前に、アメリカのある学者が取材を敢行したが、それ以外に外国の学者が取材に成功した例もない。

ヤクザに関する書籍は日本語で多数出版されているが、その多くはフィクション、ほとんどの場合、ヤクザ組織の元構成員の告白本、あるいはジャーナリストティックに書かれたものだ。KaplanとDubro共著によるYakuzasは、ヤクザと政界とのつながりを明らかに

した名著であるが、あくまでも資料を基にして執筆されているにすぎない。

ヤクザには犯罪集団と侍の末裔という2つのイメージがある

私が友人や同僚に、ヤクザに直接接触して研究すると語ったところ、信じてもみえず、心配もされ、取材を止めるように忠告を受けたりもした。実際、何度も接触を試みたものの、すべて失敗に終わった。止めるように脅迫を受けることもあった。しかし、私は諦めなかった。そして遂に、ひと出会ったことで、「学術研究」を始めるきっかけをつかんだのである。それ以来、私は数年にわたり東京に拠点を置くある巨大なヤクザ組織に密着し、研究を続けることになる。

私は文化人類学的なアプローチでこの研究を行なった。私を迎え入れてくれた組織における彼らの考え方、生活様式、組織、習慣、自己像、書き言葉、話し言葉など、さまざまな側面について研究を行なった。

ヤクザは暴力と犯罪の象徴として世間から忌み嫌われ、恐れられる一方、「裏社会を生きる

者」として、ミステリアスで、勇敢さと忠義心を備えたドラマチックな世界に生きる人々としても描かれている。日本人は、彼らを犯罪集団であると同時に、武士道を貫く侍の末裔であるとしてらえている。

しかし、近年においては犯罪集団としてのイメージが一層強くなっている。日本の社会はヤクザを排除しているものの、その存在を目にすることはできない。こうした現象は、他国の社会では見られない。

私の研究では、ヤクザが持つこうした2つの相反するイメージの相互作用を歴史的に考察した。ヤクザ自身が、こうした2つのイメージをつくることに最も力を注いでいると言っており、ヤクザは体面と名誉を重んじることから、独自の考えを持ち、イメージを確立し、自分たちのやり方を実践することで、犯罪集団としての汚名を「裏社



イスラエルで刊行された筆者の『ヤクザ、わが兄弟』のヘブライ語版



筆者のヤクザに関する日本語の著作。学術的な研究書『ヤクザの文化人類学—ウラから見た日本』（岩波書店、1995年）と小説の『ヤクザ、わが兄弟』（作品社、2007年）。後者は、取材を通して出会った人物や出来事に基づいた創作で、ヤクザの生の声と彼らの日常を伝える

会を生きる者」としてのプライドに昇華させようとしているのである。
**時間をともに過ごす中で
 極道に生きる人たちの姿を見た**

私は、東京でも有名なヤクザの親分の「子分」となった。親分は私のことを信頼し、調査の動機についても理解を示してくれたばかりか、私の研究方法や執筆方法について口出しすることは一切なかった。私は彼らと一緒に寝起きや行動をともし、祭りや飲み屋に向かい、旅もした。組織で行なわれる儀式にも立ち会った。

彼らと良好な関係を持ち、和やかな時を過ごすことができた反面、私たちが彼らの体面を尊重しなかったという理由で拒絶あるいは無視され、協力を得ることができなかったときもある。構成員の中には私に協力的な者もいれば、非協力的な者、私に敵意を表す者、また親分の命令がなければ絶対に協力しない者がいた。理由も告げず消えていった者もいれば、親友と呼べるような者ができたのも事実だ。

私はビールやウイスキーを片手に、彼らにインタビューをした。その時間は、数百時間に及ぶ。インタビューを

通して、自暴自棄な心境に陥り、社会から疎外感を感じ、社会を恨む一方で社会に受け入れてもらいたい願望を持ち、孤独感、虚栄心を抱える彼らの姿を私は見た。また彼らは、知性的な顔をのぞかせる反面、子供じみた面も持ち、心が弱く、病んでおり、プライドが高く、忠義の心に厚く、感情的で、感傷的でもあった。これが、私が目にした極道に生きる人たちの姿だった。

極道の世界には、偉大な指導者もいれば、鋭い洞察力を持つ経済学者や策士もいた。また、歴史や詩、美術に造詣が深い者もいた。書道や詩作を嗜み、高度な腕前を持つ者もいた。Uもその一人だった。社会から拒絶され、仕方なくヤクザの世界に生きている者もいれば、ヤクザは最高の世界だと確信し、この世界で生きている者もいた。勇猛な者もいれば、小心者もいた。街では怖いものなどないという者でも、家に帰れば奥さんの尻に敷かれていた。一般の社会と何ら変わりはない。

**ヤクザは日本社会の価値観、
 状況、病を反映している**

私は、いかなる点においても犯罪を支持しない。私が指摘したいのはむしろ、日本がヤクザを見るときのダブルスタンダードである。この10年間、ヤクザはより暴力的になり、より洗練されてきた。しかし、それと同時に一般的に日本社会も同様の道をたどっている。

日本における殺人と凶悪犯罪の多くは、ヤクザではなく、いわゆる「法を尊重する市民」によってなされている。知的犯罪もまたそうである。さまざまの意味で、ヤクザは日本社会の拡大鏡である。彼らは、日本社会の価値観、状況、病を、驚くべき正確さで反映するのである。

ヤクザは、まず人間であり、それからヤクザである。私は、人間としての彼らに会おうと試みた。どのような人間であれ、生得的に悪なのではない。ヤクザを悪魔化することは、主流社会とヤクザの社会の双方の更正の過程におけるもう一つの障害である。

その代わりに、青少年がヤクザの道に入ることを促すような状況に対して責任を取り、彼らを人間として理解しようとすることは、より健康的な社会をつくるために、きわめて有益であろう。結局のところ、慈悲は主な仏教的価値観の一つなのである。

（原文は英語）